



城

第七十三回

からさわやま

唐沢山城

— 乱世を泳ぎきった戦上手の城 —

山本 忠博

今回ご紹介するのは、栃木県佐野市に在る唐沢山城です。関東七名城の一つで、関東一の山城とも呼ばれます。南に向かって関東平野を見渡せる位置にあり、見晴らしの良いときには、新宿の高層ビル群も眺望できます。

戦国時代に北の上杉氏と南の北条氏という二大勢力に挟まれたこの城の主の佐野昌綱は、時に戦い、時に降伏し、時に寝返りながら、巧みに乱世を泳ぎきりました。何度か降伏している点では、第51回の小田城で紹介した小田氏治と似た境遇にあるのですが、氏治が“戦国最弱”と呼ばれるの対して、昌綱は“戦上手”と称えられています。この違いがどうして生じたのかを、これから見ていきましょう。

唐沢山城の始まり

唐沢山城の築城は、平安時代の藤原秀郷ふじわらのひでさとによると伝わります。秀郷は、平将門たいらのまさかどの乱を平定した史実と、百足退治の伝説とで有名な人物です。また、後の奥州藤原氏が、この秀郷の子孫とされることでも有名です。

ただ、唐沢山城が彼の手によるものとの説には裏付けはなく、おそらくは、秀郷の後裔とされた佐野氏が、自らの居城の歴史を脚色して伝えたというのが、本当のところでしょう。

唐沢山城の築かれた実際の時期は、戦国時代に入った頃と推測され、その築城は、佐野氏の手によるものと考えられます。

佐野氏が上杉氏と北条氏に挟まれるまで

北条氏が、1400年代末期の伊豆（現静岡県東部）から勢力を拡大して、関東の旧勢力である関東管領かんとうかんれい（室町幕府の関東支配体制のNo.2）の上杉氏（後に謙信の養父になる人物）に、河越夜戦で決定的な打撃を与えたのが、1546年のことです。これ以降上杉氏の勢力は衰退の一途をたどり、上杉氏は、1550年代後半に越後（現新潟県）の長尾景虎なが おかげとら（後の上杉謙信うえすぎけんしん）の下に逃れました。

上杉氏の救援依頼を受けた景虎は、1560年に関東に

向けて北条討伐の軍を發しました。その際に、景虎は、この時点でまだ関東管領であった上杉氏を伴っていました。関東管領の肩書きの威光はなんだかんだで残っていましたし、それに景虎の兵8,000が付いていたのですから、関東の諸勢力の多くが景虎の軍に同調しました。

ここに至って、関東は、南から攻め上がる北条氏と北からそれを阻止しようとする長尾氏（後の上杉氏）の二大勢力がぶつかり合う場となりました。その時の関東の諸将は、そのいずれに付くかという極めて難しい選択を迫られることになりました。

下野しもつけ（現栃木県）の南西の際の辺りを領した佐野氏15代の佐野昌綱も、この選択を迫られた一人です。彼の居城の唐沢山城は、二大勢力の間で十数年の内に幾度となく上杉謙信に攻められることになりました。

昌綱による唐沢山城の戦い

（1561年の戦い）上述の景虎（後の謙信）による北条討伐の軍が起こされた際は、佐野昌綱は景虎に従いました。景虎は、関東の諸将を糾合して10万を超える兵で北条氏の居城の小田原城を囲み、その間に上杉氏の養子に入って関東管領を継ぎました（景虎はこれで晴れて上杉の姓を名乗ることになります。以降、「上杉謙信」で統一します）。しかし、諸将の統率と兵糧の確保が難しく、小田原城の包囲網は瓦解しました。

謙信が引き上げた後には北条氏の反撃が開始され、これに対して昌綱はあっさり北条氏に降伏しました（ちなみに、このとき謙信は、川中島で武田信玄と対戦中でした）。これに謙信は怒り、冬の到来の間近な頃に唐沢山城を攻めました。しかし、城の堅固さと冬の到来により、兵を退くことになりました。

（1562年の戦い）謙信は関東で冬を越した後に、再度唐沢山城を攻めましたが、これも攻めあぐねて再び兵を退くことになりました。

二度にわたって謙信を撤退させたことで、昌綱の武名は大いに上がり、唐沢山城も堅城としてその名を世にと

どろかせました。

(1563年の戦い) 謙信が関東を離れて他で戦っている間に、関東の諸将の多くは北条氏に寝返っていました。そうすると、謙信はまた関東にやってきます。こうなるともう年中行事のようなものです。関東諸将の心境としては、「謙信さんがまたやってくるってよ。あの人、戦闘には強いからなあ。とりあえず謝っておこうか。それで、「ヨッ！ 関東管領！ 戦の天才！」とでも持ち上げておけば、気分を良くして帰って行くよ」と、いうところでしょうか。そんなわけで、昌綱も謙信に降伏し、開城しました。

(1564年の戦い1回目) 謙信が去ると昌綱は再び北条に寝返りました。そして、案の定、謙信に攻められました。しかし、唐沢山城は簡単には落ちません。謙信自身が後日の書状の中で、「とても険しいところだが、懸命に攻めた」と書き残しているほどの、たいへんな激戦となりました。そして、唐沢山城は、謙信に二の丸と三の丸を占拠され、本丸を残すのみとなりました。

頼みの北条氏は他に敵を抱えて動けず、昌綱が絶望的な状況の中で戦い続けているところで、関東の他の諸将が仲裁に入って昌綱の説得に当たり、最終的に昌綱が降伏することで戦いは終わりを告げました。昌綱の説得に当たった諸将は昌綱の助命に動き、謙信もそれを受け入れました。

(1564年の戦い2回目) そして、やはり昌綱は北条に寝返ります。そして、やはり謙信が攻めてきます。そして、やはり昌綱は降伏しました。さすがにこれだけ離反を繰り返されると、謙信もただ帰るわけにも行かず、このときは昌綱から人質を取っています。

(1567年の戦い1回目) 昌綱はしばらく上杉氏の下でおとなしくしていましたが、1566年に謙信が他所の城攻めに失敗して関東での勢力を減退させたために、またも北条方に走りました。そしてまたしても謙信が襲来しました。しかし、謙信は攻めあぐねて、冬の到来とともに兵を退くことになりました。

(1567年の戦い2回目) 雪解けを待つて再度襲来した謙信の前に、昌綱は降伏を余儀なくされました。しかし、またも助命されています。

(1570年の戦い) 再び離反した昌綱を従わせるために、謙信は冬場に兵を起こしました。しかし、さすがに時期が悪く、やむなく兵を退きました。

佐野昌綱の死

佐野昌綱は1574年にこの世を去りました。1559年に

佐野家の当主に立ってからの15年間を、ほぼ上杉謙信に対する籠城戦に費やした人です。上に挙げた対謙信戦は8回です。そのうち、半数の4回は謙信を撤退させています。また、降伏して開城することはあっても、力攻めで城を落とされることは、とうとうありませんでした。これが、彼が“戦上手”と呼ばれる所以です。謙信との戦力差を考えると、かなり驚きの結果だと筆者は思います。

唐沢山城のその後

その後、佐野氏は豊臣秀吉^{とよとみひでよし}の小田原征伐では秀吉に付き、戦後に秀吉の家臣の子を養子に迎えて家名を保ちました。その養子の時に本丸に高石垣を積んでおり、それが今も見事に残っています。その養子は関ヶ原の時には徳川方に付いており、戦後に佐野藩3万5千石を立藩しました。この立藩から程なくして、1602年から唐沢山の麓で佐野城の築城が開始され、その築城の過程で唐沢山城は廃城となりました。ちなみに、前出の養子は後に改易され、最終的に3千5百石の旗本になっています。

唐沢山城廃城の理由としては次のような話が残っています。それは、江戸の大火を前出の養子が唐沢山城から見ており、急ぎ家康のもとに駆けつけたところ、江戸城を見下ろせるような所に城が在ることに家康が驚き、廃城を命じたというものです。この話は半分にして聞くとしても、唐沢山城からの見通しがいかに良いかがお解り頂けるでしょう。

現在の唐沢山城

唐沢山県立自然公園の中にあり、本丸に藤原秀郷を祀る唐沢山神社があります。本丸の高石垣や空堀や土塁等が残り、ひじょうに見応えがあります。何度も書いていますが、城（城内の天狗岩）からの眺望が素晴らしいので、一度訪れてみてはいかがでしょうか。



本丸高石垣
写真提供：(公社) 栃木県観光物産協会